

昭和46年2月1日第3編郵便物認可
平成16年6月1日発行(毎月1回1日発行)
俳句雑誌 沖 第35巻第6号

俳句雑誌「おき」

沖

6月号



沖
発行所

重力

林 翔

大正俳句

「俳句」の5月号が届いた。表紙には「大特集・大正俳句の魅力」とある。明治と昭和の間に挟まって15年間しか無かった大正時代。今では滅多に見ることのない「大正」という文字に不思議な懐かしさを感じたのも、私が大正3年生生まれだからかも知れない。

人はいさ紅梅世界ふくらめり
今日晴れて春水となる坂の水
重力に舞とあらがひ八重桜
白雲も浮かべ秀つ枝の梨の花

私が生まれてから昭和になるまでの12年間、それは私の幼年期であったから、俳句など詠む筈はない。しかし当時は雑誌「赤い鳥」などの影響で、小学生には童謡が流行していた。私が一年生の時の担任の先生も童謡に熱心で、児童達によく童謡を作らせた。私の作った童謡は、よく先生に褒められて、先生が教壇で代読して下さったものである。

先生に褒められた童謡は、ノートに清書して大切に蔵って置いたのだが、戦災で灰に帰してしまった。もう思い出すすすがも無い。

靴をぬぎ先づ春泥をいとしみぬ

耳鳴りか叩きそこねし春の蚊か

書披けば髪ひとすぢや春も逝く

明日よりは老鶯ぞ声限り鳴け

風に揺れ風切るみどりの刃物かな

生くべきか否か桜は吹雪きをり

九十歳とは

明治末期から大正初期にかけて俳壇を風靡したのは、河東碧梧桐の新傾向俳句であった。碧梧桐の代表作を一句だけ掲げる。(大正七年作)
曳かれる牛が辻ですつと見廻した
秋空だ

高浜虚子は当時、俳句よりも小説に熱中していたのだが、新傾向俳句が俳壇を席卷しようとするのを見ては、これではならじと思つたのだろう。大正二年作の、

春風や鬨志いだきて丘に立つ

の名句は、新傾向俳句に対する伝統俳句の宣戦布告のようなものであった。

林 翔



九十九里

能村 研三

川柳作家・久良伎の句碑

九十九里終の一里は南風ぐもり

万祝の藍より青し卯月波

卯波晴名工伊八は波刻む

竹の秋伊八の波は宝珠の炎

市川市の北西部国分の台地の、森に囲まれた中に建つ国分寺。現存する建物は江戸・明治以降に建てられたものだが、古くは天平時代聖武天皇の命によつて全国に建てられたものの一つで、下総国分寺の中心は現在の国分寺とはほぼ同じ場所にあった。その境内の本堂の右手奥に、大きな矩形の川柳句碑が建っている。五月鯉四海を呑まんず志

阪井久良伎

作者の阪井久良伎は明治三十六年頃から川柳革新の主軸を担った人で「川柳中典の祖」とも言われた。昭和六年から市川に隠棲しながら川柳の本道を説き、市川真間において昭和二十年に逝去した。

横浜で生れた久良伎は新聞「日本」の記者となるかたわら、同じ新聞社にいた正岡子規とも親交を深め、当时子規が俳句革新を終わって、和歌革新の機運が高まったとき、第一声

茅花流し伊八の波の欄間彫

群千鳥卯波びかりに旋回す

夕風ぎて千恵子の浜の群千鳥

南吹く防砂を果たす磯馴松

九十九里果つ隠れ江の夏怒濤

九十九里終始としての青岬

『歌よみに与ふる書』に示唆を与えたのは久良伎であったが、しかし久良伎は子規に兄事した。最初は歌人を志したが、川柳作家に転じたのは子規の影響による。

句碑となった久良伎の川柳、自らの書を刻んだものだが、その筆勢のごとくに、深まる志を高らかに詠んだもので、五月鯉そのものに成り代わった作者自身の気持は、四海とは日本を取り囲む四海であるから、日本全土にその志を押し示したのだ。

「呑まんず」の「ず」は打ち消しの意味ではなく、文語でいう「むず」で「むとず」と同じような意味を持ち、「む」より強い語調の時に使われるようで、こんな所にも作者の志の深さと強さがうかがえる。

能村研三



蒼茫集



木椅子

田所節子

木々芽吹き湖は夕日の反射鏡
夕かげりか齡の翳か滝桜
もの想へと木椅子のありぬ花の下
爪ほどの草引き地虫誘ひだす
悼小沢きく子さん
春眠なら覚めよお顔のやさしかり
鳥雲にきく子と訪ひし山河かな

山肌

菅谷たけし

青空のどこにも触れず桜咲く
地虫出づしばらくこの世賑はふか
こ糸洩るるやうや嘴めく牡丹の芽
遠辛夷電飾のごと日を返す
蛇穴を出づるか孔子廟しづか
木落としの山肌癒す春の雪

あきらめ色

久染康子

瞬いて雨滴を払ふ孕み鹿
篝焚く二の腕白きさくら守
さくら一本裏山急に富みにけり
さくら薬あきらめ色をしてあたり
遍路着の暮色に浮かぶ峠みち
両の手で沸点掬ふ噴井かな

棚の藤

長谷川鉄夫

なびくなど知らぬ初花棚の藤
山見ゆるまでふらここを蹴り上げし
粗結びして子に渡す葎箱
桜薬降る浪人と決まりし子
花散れり児等の砂場の高嶺にも
児が覗く手籠の奥の染卵

潮鳴集



嘯 中島あきら

嘯や耳を滌ぐといふことも
全山のさくら酔してゐたりけり
散るといふ遊びせむとや桜満つ
歓声のやがて嘆声花吹雪
名水を仰ぎ飲みして花惜しむ

妣の帽子 荒井千佐代

聖堂の横に舟着く朝ざくら
祈らむと膝折れば瑠璃いぬふぐり
みどりごのひつばるしだれ桜かな
踏青や妣の帽子を深くかぶり
底抜けのあをぞら爆心地の桜

初雲雀 森本純子

伊吹嶺の片雲に入る初雲雀
子燕の口開く午後の茶房かな

若布刈舟流れに乗るも逆らふも
燕ひくし正午は人の居ぬ港
楠若葉径のはるがに川一縷

みちのくの空 岡部玄治

たれかれにかよふおもざし流し雛
裏窓をひらいて今朝の春の山
降りやみて宝珠のしづく林檎の芽
さくら咲きみちのくの空せつに紺
昼すぎのあくびになみだ春惜しむ

追想の椅子 角田沙羅

土蔵さへ土産売場に梅の郷
トレモロの音階高め春の川
老いし身に追想の椅子ふらこは
悪筆も誤字もひたむき受験絵馬
叶ふなら吾も戻りたや雛の世に

沖作品



能村研三選

陽炎やシルクロードと奈良の距離

指笛は風の言葉よ麦の秋

竹の秋雨まつすぐになりにけり

光量を測りてをりぬ辛夷の芽

余寒なほオカリナの音の透き通り

焼け残る芝に二度目の火を配り

反対の拳手は我のみ万愚節

ものの芽に遅れ従ふわが身の芽

花冷の熱きおしぼりよかりけり

春愁や灯の切れ目なき街に来て

春めくや日照雨にひかる能登瓦

滑翔の鷹の保呂羽の唸りかな

風光る鋳物師の町のわらべ像

橋脚に渦の生まるる雪解川

岩渡る度に手を取り磯遊び

春の夢泡より生れしネプチューン

市川市

内山 照久

岩手

遠藤 とく

千葉

小松 誠一

東京

工藤 進

春耕や土覚まさせて眠らせて

花ぐもり水中歩行してをりぬ

円蓋は宇宙のかたち復活祭

蛇穴を出でて流行のシャツを着る

石鹼玉生れしばかりの風に乗る

散ることに桜はいのち使ひをり

草原に寝て春愁のいま旺ん

涅槃図をこぼれて遊ぶ群雀

すこしづつ風に流され揚雲雀

仲見世の裏の直線燕くる

無心とは雲を遊ばす春の水

土器破片つなぐ土練る遅日かな

畦焼く火盆地に力もどりたる

廐出し雪の山脈彫深し

春雨や東京といふ娘の住む街

蒼き天より一爆の春こだま

東京

中尾 公彦

千葉

深田 雅敏

北海道

梶川智恵子

千葉

鈴木 伸一

地吹雪の籟に息のむ能登狼煙
 隠れ江の波の響の春惜しむ
 嵐棲む畑に種蒔く卒寿かな
 アルプスの水磷磷と花山葵
 誓ひの手聖書に重ね風光る
 春風に選る寿ぎの記念の木
 八十路なる母の手編みの春シヨール
 川上に風切り返すつばくらめ
 ワイナリーに蚕部屋のむかし甲斐の春
 ふしあなに光ひとすぢ春の蠅
 ものの芽の夜空押しあぐ力かな
 揺れもせで夕風さそふ竹の秋
 菜の花や球形タンク転げさう
 一隅の春蘭明かり妻癒ゆる
 喪帰りのあらぬ饒舌浅蜷飯
 遠乗りの新車にけふの春埃
 眼裏の山霞みをり鮒を釣る
 遠足の乗りし電車の浮力かな
 白魚を食うべ眼の透きとほる
 白血球減るや身を退く雪解風
 浅春の日差し松葉のささら揺れ
 玻璃越しに耳目凝らすや春一番
 別れ雪思ひのたけの嵩五寸
 長き嘴抜きて春泥したたらす

長野

矢崎すみ子

東京

福嶋千代子

千葉

廣島 泰三

鈴掛 穂

新潟

荒木伊左夫

佐々木よし子

岬宮の箒目しるし落椿
 嫁がせてピアノに淡き春の塵
 春筍や産衣のやうな皮を被て
 閉ぢし店多き通りを燕来る
 文鎮に重さ加はる春霞
 花曇角の優しき金平糖
 注射器の煮沸の長し春の昼
 バーひとつ上げて助走す木の芽風
 独りだけのシュートを決めて卒業す

市川市

近藤 栄治

林 昭太郎

新人賞予選句（六月）

陽炎やシルクロードと奈良の距離
 焼け残る芝に二度目の火を配る
 滑翔の鷹の保呂羽の唸りかな
 円蓋は宇宙のかたち復活祭
 散ることに桜はいのち使ひをり
 仲見世の裏の直線燕くる
 畦焼く火盆地に力もどりたる
 蒼き天より一爆の春こだま
 アルプスの水磷磷と花山葵
 川上に風切り返すつばくらめ

内山 照久
 遠藤 とく
 小松 誠一
 工藤 進
 中尾 公彦
 深田 稚敏
 梶川智恵子
 鈴木伸一
 矢崎すみ子
 福嶋千代子

沖作品 選後句評

*
能村研三

陽炎やシルクロードと奈良の距離 内山 照久

シルクロードは「絹の道」とも呼ばれ、何千年の昔から、アジアとヨーロッパを結び物資の交流、文化の伝来の役割りを果たしてきた。シルクロードがもたらした役割はユーラシア大陸だけに終わったのではない。海を越えた東の果ての日本にも、このシルクロードを通じて仏教やさまざまな文化が伝来した。奈良の正倉院に残る中国製、イラン製の宝物が残されていることから、そのつながりの深さがうかがえ、シルクロードそのものが、日本のルーツを探るのにも重要な意味を持っていた。十六、七年前に奈良で「ならシルクロード博」なるものが開催され、私も見に行った覚えがあるが、古代の都である飛鳥や平城京に伝えられた文化が果てしない遙か古代アジアから伝えられたものであると思うと、歴史へのロマンが広がる。作者の今眼

前にあるものは、ただの陽炎だけでも知れないが、その陽炎の向こうに広がる先人が築きあげた文化交流に思いを馳せた。

焼け残る芝に二度目の火を配る 遠藤 とく

遠藤とくさんは、岩手県の渋民村よりさらに奥に入ったところに生まれ住まわれている方だが、三月の合同出版記念会に著者の一人として出席された。年齢的にも高齢の方ではあるが、自分なりの経験を活かしたオリジナルな句が出来る人である。この句も実際の経験がなくては出来ない句である。芝焼きは新しい芝の発芽をうながすために古い草を焼くものであるが、焼き残すことは許されず、とことん焼き尽くすまで何度でも火をつける。下五の「火を配る」が自然で作者のやさしい心もうかがえる。

滑翔の鷹の保呂羽の唸りかな 小松 誠一

私の句集『滑翔』の刊行を祝つての挨拶句としての意味もあるだろうが、それとは関係なく一句としてもしつかり詠まれている。滑翔は鷹が山の気流を読んでエネルギーを使わずに滑り降りてくることを言うが、鷹の羽根の構造を詳しく詠んだもので、保呂羽は鷹の両翼後縁に並ぶ大形の風切羽とは違って、鷹の左右のつばさの下に生えそろうた羽で、鷹が飛翔するときにはそれが唸りをあげるのは壮観であろう。(以下略)